

寄稿 Rhif 5 **カムリ学 雑学 の勧め (1)**

カムリの国の七不思議 — カムリ学落穂拾い

*Miscellanea mewn Astudiaethau Cymreig (1)*

“Saith Rhyfeddod Cymru”

— Lloffion Astudiaethau Cymreig —

水谷 宏

はじめに

筆者は、1953年以降の学生時代から1968年ごろまでは、トマス・ハーディ Thomas Hardy (1840-1928) や ジョージ・エリオット George Eliot (1819-80) などの小説を始め、イギリス文学に深い興味を示していた傍ら、そうした文学作品との関連から、南部イングランド地方ドーセット州 Dorsetshire のウエセックス地方の方言や細江逸記博士の中部地方方言の研究に触発され、イングランド英語の方言研究と英語音声学の分野での研究にも関心をもっていた。そのころは、自分がまさか、カムライグ語の研究やカムリ学の世界に飛び込むなどとは思ってもよらなかった。それどころか、カムリ — 当時は、英語の ‘Wales’ からの借用語である「ウェールズ」という呼称を使って、そう呼んではいたものの — の国が、ただ、イングランドの西側に隣接している地方との認識しかなく、「イングランドの一部」に過ぎないという、まったく誤った考えしか持っていなかったのであった。

ところが、そのような筆者は、1968年度に、英国大使館文化部 The British Council の給費生として、バンゴール市にある北ウェールズ大学の音声学・言語学科での研修の機会が与えられたのを機に、研修の主題であった「一般音声学ならびに調音音声学の立場からの英語音声学、特に、リズムとイントネーションの研究」の傍ら、カムライグ語やカムリ学、さらにはケルト学の分野での

研究をも始めたのであった。言語に興味のある者として、折角のカムリへの研修の機会が与えられたのであるから、この機会に、少しはカムライグ語やカムリについても勉強しておこうとの考えから始めたのがきっかけとなり、次第にカムリの世界へと入っていったのであった。

当時の日本では、カムリに関する情報は極めて乏しく、皆無に等しかったと言っても決して言い過ぎにはならない状況であった。カムライグ語やカムリ学に関する文献資料も、まったく入手できない有様であった。第一、日本語としては、そのような言葉さえ存在していなかったし、21世紀になった今でも、日本で出版されている辞書の類には、収録されていないことばなのである。今日のように、インターネット等で、国内外の諸大学の図書館の蔵書の情報が入手できる時代が来るといふことなども、想像すらできなかった。筆者のバンゴール時代の暮らしは、昼間は主目的の音声学関係の研修に没頭し、夜は、週二回、ケンブリッジ大学で修士号を取得し、筆者と同じ学科に籍を置いていたカムライグ語を第一言語とする学友が教えてくれていたカムライグ語のコースに出席して、口語カムライグ語の習得を試みたりしたが、その他の夜は、バンゴール大学の図書館に出かけてケルト学や、カムライグ語、カムリ学関係のセッションに、閉館まで居残って情報の収集に努めていたのだった。

そんな時代に始めたカムリ学の世界では、‘Yn wir?’ /アンウィール/「本当？」と疑ったこともあったし、‘Amhosibl!’ /アムホシブル/「まさか！」と否定したこともあった。さっぱり理解ができなくて、苦しんだことがたくさんあった。不思議に思ったことも多々あった。その後、何度かカムリの土地を訪れて、研修や調査活動の機会も与えられたが、振り返ってみれば、まさに「五里霧中」の状態の中に身をおいての半生を、カムリ学とともに生きてきたという実感がある。40年を経た今でも、その実感を持ち続けている。判らないことが多く、現地で収集した膨大な文献資料を漁りながら、途方に暮れることもしばしばである。正直に言って、消化が不十分なところも決して少なくはない。

幸い、定年後は、当然のことながら、時間的余裕もあり、カムリをじっくりと観察することができる日常に身を置いて暮らしている。そのような筆者にとっては、正に「カムリ再訪」Cymru eto /kəmri eto/ の世界を満喫できる暮らしである。そうした暮らしの中から、今まで進めてきた筆者なりのカムリ学 Astudiaethau Cymreig では、現地調査の他、現地各地の図書館や博物館等々で入手した文献資料からの情報は言うに及ばず、現地でお世話になった、専門家を含む多くの知人、友人から教わって得た情報等、書物や論文での公表に適さないものも多く含まれている。中には、「まったく枝葉末節だ」と思われる向きもあろうかと思われるが、せめて「雑学の勧め」として纏めておくのも一つ

の方法かと考えて、正に「落穂拾い」Lloffionとして集めておこうと、本稿を執筆することにした。既に、地名研究については「研究ノート」として「落穂拾い」を本会のブレティン *Bwletin* 「日本カムライグ研究」の第2巻第1号から連載させていただいているが、本稿をその姉妹編としたい。解決した問題を研究結果として公表する論文や研究ノートとして、*Bwletin* に投稿するよりも、「カムリ学雑学の勧め」として、不思議に思っていることや、疑問点を関係付けながら記述して、この会報キルフラシール *Cylchlythyr* に連載するのが適切かと思い、本号からの連載とした。

## 1. “Saith Rhyfeddod Cymru”

最初に、本稿のカムライグ語のタイトルに採用した “**Saith Rhyfeddod Cymru**” — サイス・フラヴェゾッド・カムリ — 「カムリの七つの不思議」というのは、敢えて蛇足を顧みず付け加えるならば、カムリには不思議の数が七つあることを意味するのではなく、カムリについて知ろうとすると、不思議なことがたくさんある、という意味である。ダブル・クォーテーションを付したのは、次のような事情からである。読み人知らずの詩にこのタイトルが付けられたものがあり、英語のタイトルも “**Seven Wonders of Wales**” となっている。18世紀後半から19世紀前半にかけて、主にイングランド人（本稿では、敢えて「イギリス人」という呼称を用いず、「イングランド人」と呼ぶのは、現在の日本語では「英国人」—イングランドに住むアングロ・サクソン系住民のほか、スコットランド、北アイルランド、カムリに住む所謂「ケルト系」住民も含めた呼称— に対して用いられる「イギリス人」と区別するためである）の文人や詩人たちが、カムリの土地を訪れて、“**Tours of Wales**” のタイトルを付けた旅行記やカムリに関係付けした詩を残していて、Daniel Defoe (1660?-1731), William Wordsworth (1770-1850), Samuel Taylor Coleridge (1772-1834), Thomas Love Peacock (1785-1866), George Borrow (1803-81) と言った著名な文人・詩人の作品は、英文学に関心のある読者にも知られているものであろう。当時の浪漫主義との関連で、カムリは、イングランドの人々に関心を引いたとされている。そうしたカムリを訪れるイングランド人旅行者 Teithwyr の興味を引こうとしたのが、この読み人知らずの詩 “**Seven Wonders of Wales**” とのことである (Stephesn, Meic 1986: 530)。本稿では、この詩についての記述や解説を加えようとするのではなく、ただ、タイトルだけを借用して、筆者が、常日頃、カムリについて「不思議だ」と思っていることを中心に、感想や私見を述べてみようと思う。

## 2. George Borrow の *Wild Wales*

自然に対する畏敬の気持ちや、まだ見ぬ遠い土地への憧憬の気持ちの発露であるならば、その対象はカムリである必要はなかったはずである。ヨーロッパや極東の地が、本来ならば、その対象となったのである。しかし、そうした土地への旅は、危険を伴うばかりでなく、高価な旅を強いられるのであった。資本主義経済そのものが「発展途上」にあったイングランドの裕福層にしてみれば、イングランドの真西に隣接している「ウェールズ」は、危険も少なく、安価な旅を楽しめる恰好の土地であった。“Mountain” という単語は英語にはあるが、「山」のないイングランドに住む人々には、山岳地帯と渓谷や湖に恵まれた、イングランドのことばで呼ぶ「ウェールズ」こそ、正に「お膝元」にある、憧れの自然を満喫できる場所であったのであろう。16世紀以後、次第に成長を続けていた「大英帝国」の最初の「植民地」である「ウェールズ」即ち「カムリ」そのものに知的興味の対象を求めたというのでは決してなかった、と推測できるのである。セシル・ジョン・プライス Cecil John Price (1915-91) — ‘Price’/prais/ という人名は、カムライグ語の人名 ‘ap Rhys’ /ap ris/ 「アップ・フリース」即ち「フリースの息子の」が英語読みされて出来たものである (Morris, T.E., 1938: 6) が、カムリの人名については後述の予定である — は、ジョージ・ボロウ (以下、ジョージ) の *Wild Wales, its People, Language and Scenery* (1862) の Fontana 版 (初版は1977年、手元の版はその第3刷 1982年版、以下、Borrow, G. (1982) とする) の序文で、トマス・ペナント Thomas Pennant (1726-98) の、サンゴセン Llangollen は北カムリで一番の景勝の地であるとの記述を引用したあと、次のように評している。

‘Surrounded by such glorious scenery, tourists were filled with awe at the wonders of the creation. They were moved by the new romanticism to put down their rather superficial impressions of the country on paper. Many of their journals were printed and their number was further increased once the Revolutionary and Napoleonic wars began. Many people who would otherwise have gone abroad, now chose to visit Wales, the strange land that could be easily reached.’ (p. 12.)

そのようなイングランド人の旅行者 Teithiwyrr / Tourists の中で、‘ymdeimlad gwrth-Babyddol ffyrnig’ (Stephesn, Meic 1986: 47) 即ち「辛辣な反ローマン・カトリック主義的感情」の持ち主と呼ばれているジョージは、カムライグ語も堪能に話すことができたイングランド人として、「カムリ」そのものが興味の対象となった文人であった。*Wild Wales* の記述、第5章、特に、39ページから41ページのレクサムからサンゴセンへの旅の様子を細かく述べた件

は、当時のこの地方の言語状況を見事に描写しており、「併合法」(1536年)以後のカムリの「英語化」Anglicisationの過程に関する情報を、現代のわれわれに正確に伝えてくれるのである。当時すでに完全に「英語化」されたレクサムレクサムの町から、その西側に南北に細く伸びる「二言語併用地域」Bilingual Zone、そして、そのさらに西側に広がる「カムライグ語の単一言語使用地域」Monolingual Welsh-speaking Zoneが、見事に描き出されていて、カムライグ語に堪能なジョージならではの描写である。

ジョージは、妻子を列車で先にサンゴセンに見送った後、チェスターから徒歩でカムリの国に向かう途中、カムリの最初の町、レクサム Wrexham (カムライグ語の綴りでは Wrecsam) で出会った労働者に、カムライグ語は 'cwrw da' 「いいビール」だけしか知らないが、「みんながそう呼ぶから、われわれはウェールズ人だよ」の答えに失望し、

*'I arrived at Wrexham, . . . The town is reckoned a Welsh town, but its appearance is not Welsh—its inhabitants have neither the look nor the language of Welshmen, . . .'* Borrow, G. (1982: 39)

と記述しているのである。そして、さらに旅を続けて、多分レクサム Wrecsam からクロイソスウェスト Croesoswellt (英名 Oswestry) に向かう今の A5 号線を南下して、7-8キロのところにあるフリウアボン Rhiwabon に着く直前に、貧しく病にかかっていると思える婦人に施しをせがまれ、「ウェールズ人かイングリランド人か？」と尋ねる。その婦人は、

*"Welsh," she replied: "but I speak both languages, as do all the people here."* Borrow, G. (1982: 40)

と答えたと言述している。フリウアボン Rhiwabon から妻子の待つサンゴセン Llangollen への道は、ほぼ真西に向うが、多分、今の A535 号線を歩いたものと思われるが、その道で、ジョージとは逆にフリウアボンに向う婦人に会い、次のような会話を交わす。

*A woman passed me going towards Rhiwabon; I pointed to the ridge and asked its name; I spoke English. The woman shook her head and replied "Dim Saesneg."*

*"This is as it should be," said I to myself: "I now feel I am in Wales." I repeated the question in Welsh.*

*"Cefn Bach," she replied—which signifies the little ridge.*

*"Diolch iti," I replied, and proceeded on my way.*

Borrow, G. (1982: 40-41)

その後、サンゴセンのホテル 'inn' で家族と共に夕食を食べながら、"Codiad

yr ehedydd” 「上げひばり」 (codiad ‘rise’, yr ‘the’, ehedydd ‘lark’) という曲のハーブの演奏を楽しみながら、「間違いなく、私はウェールズにいるのだ！」 Borrow, G. (1982: 41) と感動しているのである。

因みに、この曲 “Codiad yr Ehedydd” は、*Geiriadur Prifysgol Cymru* (以下、*GPC*) の *Codiad* の項目にも引用されており、‘1701 E. Wynne: *RBS* 56. C. yr Ehedydd: *The Rising of the Lark, title of a Welsh air*’ (t. 527) とある。ジョージは、作品中でカムライグ語を使うときには、英訳を添えているが、この曲名にはそれがない。当時のイングランド人読者にも英訳が不必要なほど有名な「ウェールズの曲」 *a Welsh air* だったのかどうかは、筆者には不明である。「カムリの国の七不思議」の一つに数えておこうと思う。もっとも、カムライグ語がまったく判らないイングランド人であっても、読み方こそ [‘kəudjæd r ‘ehədɪd] のような「英語読み」になろうとも、この文脈では、「ウェールズ語の歌」の曲名だろうと想像することは不可能ではないと推測できる。

次いで、*GPC* が掲載している人物のエリス・ウィン Ellis Wynne (1671-1734) は、Stephens, Meic (1986:644) によれば、‘llenor crefyddol a aned yn Y Lasynys,’ (llenor 「著述家」、crefyddol 「敬虔な」、a [関係代名詞]、aned 「生まれた」は動詞で、動詞的名詞(辞書形) geni 「生まれる」の非人称過去形、yn 「～で」は前置詞で「場所」を表す、Y Lasynys 「ア・ラサニス」は地名で、ハルレーヒ Harlech 23/5831 の北東 2 キロほどの地点 23/5932 であるが、現在の地図には出ていない失われた地名である。なお、地点番号の読み方は、本会機関誌「日本カムライグ研究」*Bwletin* 第 2 巻第 1 号 38 ページ参照のこと) 「ア・ラサニス生まれの敬虔な著述家」で、‘Fe’i hurddwyd yn offeiriad Anglicanaidd yn 1704...’ (Fe は、動詞前虚辞、’i は、人称代名詞三人称単数男性の所有を表す形で、カムライグ語では、このように動詞 hurddwyd の直前に置かれると、この動詞の目的語となる。動詞 hurddwyd は、辞書に掲載される形、動詞的名詞の形 urddo 「任命する」の非人称過去(受身を表す)である。その次の yn は「補語の yn」と呼ばれ、補語 offeiriad 「牧師」を伴っている。Anglicanaidd は、形容詞「国教会の」、次の yn は、前置詞「～に」(時を表す)で、1704 「1704 年」) 「1704 年に英国国教会牧師に任命された」とある。そして、*RBS* = *Rheol Buchedd Sanctaidd* (rheol ‘rule’, buchedd ‘life’, sanctaidd ‘holy’) 「聖なる生き方の規則」(1701) は、Jeremy Taylor の *The Rule and Exercises of Holy Living* (1650) の 18 版をカムライグ語に訳したものである。どのような文脈でこのカムリの曲「上げひばり」に言及しているのかは、筆者は同書を未見であり、いまのところは不明である。

カムリの曲「上げひばり」と、人物のエリス・ウィンに関しては、特に後者

については、わが国ではカムリの人物に関する情報が少ないことを考慮して、敢えて煩雑を顧みず、「落穂拾い」の一つとして、簡単な紹介を試みた。

さて、カムライグ語に堪能なイングランド人ジョージ・ボローとは対照的に、カムライグ語がまったく話せないカムリ人 Cymro であった、先述のトマス・ペナント (1726-98) の北部カムリの旅の記述である 3 巻本の *Tours in Wales* (1778, 1781, 1783) と、ギラルドゥス・カンブレンシス (c. 1146-1223) の *Itinerarium Kambriae* (1191) (英訳は、Gerald of Wales (1978) *The Journey through Wales and The Description of Wales*, trans. Lewis Thorpe, London: Penguin Books)、そしてジョージ・ボローの *Wild Wales* を加えた三人の旅人のカムリの国の観察と記述については、先述のイングランド人浪漫派詩人たちのウェールズ旅行などとともに、本会の代表幹事をされている吉賀憲夫氏による詳しい紹介、『旅人のウェールズ—旅行記でたどる歴史と文化と人』2004年(晃学出版) という好著があり、是非、参考にさせていただきたい。

### 3. George Borrow の Cymraeg

次に、ジョージのカムライグ語について述べることにする。筆者は、個人的には、同じ外国語としてのカムライグ語を身につけたものとして、*Wild Wales* を読む限りでは、そこに時折挿入されているカムリ人とのカムライグ語での会話などから判断して、当然のことながら、素晴らしい口語カムライグ語の使用能力の持ち主であると、尊敬している。周知の事実としては、彼は10ヶ国語以上の外国語をマスターし、*Wild Wales* 第1章 (pp. 21-24.) で自ら語っているように、カムライグ語については、文章カムライグ語 'book Welsh' は独学で習得していて、発音と口語カムライグ語を馬丁 'groom' に習ったとある (Cf. 'I learnt Welsh pronunciation from him, and to discourse a little in the Welsh tongue.'). そして、文章カムライグ語に関する限りは、その馬丁自身も認めた (Cf. 'and he himself acknowledged,') とおり、ジョージの方が実力は上だったとある (Cf. 'I was stronger than himself,'). 一般的に言って、文章語に関する限りは、外国人学習者の方が母国語話者に比べて「実力は上」という現象は、時折、どの言語でも観察されることであろう。社会言語学が、文章語は誰の母国語でもなく、学校等での教育を通して習得されるものである、と説明する所以であろう。カムライグ語では、他の言語と比べても、「併合法」(1536年)以降の「英語化」の影響で、グリフィス・ジョーンズ (1683-1761) による「カムライグ語巡回学校」Welsh Circulating School の努力にもかかわらず、そうした傾向は顕著である。カムライグ語の使用が同法令により、実質上、家庭内と教会での使用に限定されたために、多くの言語使用域 Registers の発達が阻害されたためである。

Among the effects of the disadvantaged position of Welsh since 1536 has been that Welsh people found advancement possible only through English, while the lack of official recognition has hampered its development of a full register range.

(Ceinwen H. Thomas (1982: 87.)

との発言もある。筆者自身の体験（2000年、Sain Ffagan）では、脱穀した麦を風力で飛ばして選別する方法について話しているときに、“disgyrchiant” /dis'gɔryxjant/ を使って通じなかったのが、意味がよりわかりやすいはずの“pwysigrwydd” /pur'sigruið/ を使ってみた。それでも通じなかったのが、やむなく、英語で“gravity”と言い、やっと意思の疎通を図ることができた。また、ティゼウイ Tyddewi の Gwely a Brewast / Bed and Breakfast では、“cyfeiriad” /kə'venriad/ が通じなかった経験（1983年）もあり、英語化が特に進行していたペンヴロ州南西部では、口語カムライグ語の中にすでに英語からの借用語“address”の使用頻度が高かったのであろうと推測している。現代日本語でも、「掣肘を加える」と言って理解されず、「コントロールする」と言えば通じるような事態も現実に起こり得るのではなからうか。敢えて、ジョージに口語カムライグ語を教えた馬丁を擁護する次第である。

ジョージの口語カムライグ語学習を手助けした馬丁のカムライグ語は、‘taught me two or three things besides Welsh pronunciation; and to discourse a little in *Cumraeg*.’ (p. 23. 太字の斜字体は筆者) から判断して、出身地はカムリ南西部の恐らくはペンヴロ州 Sir Benfro であろうと推測する。理由は、‘*Cumraeg*’の綴りで、ジョージが /kəm'raig/ ではなく、/kum'raig/ という発音を表したのなら、そのような発音の地域はペンヴロ州の北部一帯であるからである。

さて、ジョージの使用するカムライグ語について、現地でこんな意見を耳にしたことがあった。筆者が、「ジョージ・ボローのように、カムライグ語を流暢に ‘yn rhugl’ /ən rɪgl/ 話したイングランド人もいたではないか」と言った筆者に対して、「しかし、多くのカムリ人には、彼の言語使用域 register は、丁寧さにおいて不自然だ、と思える」との意見だった。推測するに、上記の Borrow, G. (1982: 40-41) からの引用文中の最後のところで、尾根 ridge の名前を尋ねて、‘Cefn Bach’ 「ケヴン・バーハよ」と教えてもらったのに対して、‘diolch iti,’ 「ありがとうね」と礼を言ったときのカムライグ語の使用についての反応ではないかと想像している。現代カムライグ語の用法では、家族や親しい間柄の人たち、さらには子供に対しては ‘ti,’ が用いられるが、初対面、しかも外国人の場合には ‘chi’ を用いるのが普通である。現在の学習者向けの教科書類では、以下のよ

うな記述がなされている。

### 127. TI or CHI?

The use of the 2nd pers. sing. and 2nd pers. pl. pronouns in Welsh closely follows the practice of other European languages, e.g. French, Russian etc. **TI** is the more restricted.

**TI**, being singular, can only be used of one person. It is not only singular, but also familiar, and these two considerations combine to give a very narrow field of use. It is appropriate with:

- (a) a close member of the family
- (b) a close friend
- (c) a child, whether related or not
- (d) an animal
- (e) God

To use **ti** to an individual not from one of these categories can be construed, and can equally be intended, as offensive or, at the very least, deprecating. King, G. (1993: 93-4)

Caradar (c. 1925: 30) も同様の区別に言及しており、この用法は、20世紀には確立していたと思われるが、中期カムライグ語や聖書のカムライグ語では、この区別はなかった。ジョージがカムリの婦人に直接語りかけた19世紀半ばにまで、中期カムライグ語の用法が残っていたのか、あるいは、文章カムライグ語、特に、聖書のカムライグ語に堪能だったジョージには、'diolch iti,' で「ありがとうございます」という丁寧さの表現だったのだろうか。

引用文の最後の状況では、当然、ジョージは 'diolch ichi,' 「ありがとうございます」と礼を言うべきであった。それなのに、'diolch iti,' 「ありがとうね」と言ったのは、何故だろうか。カムライグ語に堪能なジョージは、そのような使用域の違いは知っていて、当時のイングランド人の 'Welshman' なり 'Taffy' (p. 22. にはこの単語が使われている) に対しての自然な人間関係として、イングランド人の自分が 'Taffy' に礼を言うのだから、'diolch iti,' 「ありがとうね」を使うのが適切だと判断したのだろうか。East Anglia にいたころの自分と馬丁との人間関係から、そう判断したのだろうか。あるいは、馬丁に礼を言うときには、決して 'diolch iti,' と使っていた関係で、そのような口語カムライグ語の使い方に慣れてしまっていたからであろうか。カムライグ語が第一言語ではない筆者には、判断のむずかしい問題である。

なお、ついでながら、引用文の同じ個所に出てくるケヴン・バーハ 'Cefn Bach' 「小さい尾根」であるが、現在手元にあるどの地図を見ても、'Cefn Bach' はな

く、ケヴン・マウル 'Cefn-mawr' 「おおきい尾根」(33/2842) となっている。Rhiwabon (33/3043) の南1キロほどのところ、サンゴセン Llangollen (33/2142) へは、西へ9~10キロの地点である。ジョージに教えたカムライス Cymraes 「カムリ人婦人」が間違っただのか、それともジョージが「大きい」と「小さい」とを覚え違いをしたのか、その辺りも不明である。一つの可能性として、筆者は、次のようにも考えている。

このカムリ婦人が 'Cefn Bach' と答えたのは、カムリ人特有のギャグであって、一つには、イングランド人のジョージを揶揄する気持ちもあったのかも知れないが、'Cefn-mawr' と呼ばれているこの 'Cefn' は、決して 'mawr' ではなく、そこでこの婦人は 'Bach' と振ったのではないかと推測できる。「あんな尾根のこと、みんなは「大きい尾根」と呼んでるがね、なんのなんの、高が知れた「小さい尾根」に過ぎないよ、イングランドからの旅のお人さんよ」という気持ちがこもった 'Cefn Bach' 「小さい尾根よ」ではないだろうか。「ケヴン・バーハ」を、/ ʌ \ / のように、カムライグ語の抑揚（イングランドの人たちは、'a Welsh lilt' と呼ぶ）で音読すれば、この機知に富んだカムリのおばさんの気持が一層よく理解できるように思われる。この種の冗談は、カムリの人たちは、初対面の外国人に対しても、よく使うものであり、駄洒落が決して嫌いではない筆者もしばしば楽しませていただいたことがある。真面目なジョージは、小さい尾根を目にしながらか、この婦人の 'Cefn Bach' という返事を、言葉どおりに受け取ったのかも知れない、と、筆者はこの件を楽しく読ませていただいた。

なぜ、このようにジョージとカムリ婦人との会話 'discourse' を、まるでそばで立ち聞きしたかのように想像したのかということ、つぎのようなことが判ったからである。後に、1986年夏、筆者は、'Cefn Bach' を確認しようとするこの地を訪れたが、この 'Cefn' は、確かに 'mawr' と言えほどではなかったのである。ところが、1993年に私学助成で金城学院大学図書館に設置された「ウィリアムズ文庫」Llyfrgell Ifor Williams で調べてみると、次のような記述を見つけたのであった。

Cefn Mawr.—The name signifies a high ridge, so called to distinguish it from *Cefnbychan*, which is in close proximity.

English name—Highridge. (太字斜字体—筆者)

Morgan, The Rev. Thomas (1887: 102.)

*Cefnbychan* /ˌkevnˈbeɪxən/ 「ケヴンバハン」の *bychan* は、*bach* と同じ「小さい」を意味する形容詞であり、固有名詞としては「小尾根」と邦訳可能である。'Cefn Mawr' 「大尾根村」(33/2842) の地名は、Davies, E. (*golygydd*) (1975:

27) には収録されていて、‘*pl., p.*’ = *plwyf, pentref*/pluiv, pentrev/「教区、村」として掲載されているが、Richards, M. (1969: 38) では、単に ‘Cefn’ として収録し、その後に (Cefn-mawr) と括弧がついており、「元は Rhiwabon の「町」 tref = town であった、Denbigh 州 Wrexham の「田園地域」 rural district」として掲載されている。町村名としての ‘Cefnbychan’ 「小尾根村、もしくは、小尾根町」は、モルガヌッグ Morgannwg やカイルナルヴオン Caernarfon にあるものは Richards, M. (1969: 38) に収録されていて、Davies, E. (golygydd) (1975) にはない。となると、地名としてではなく、尾根の呼称としては、このフリウアボン Rhiwabon の南 1 キロの地点 (33/2842) には ‘Cefn Mawr’ 「大尾根」と呼ばれる「尾根」だけである。そして、尾根の呼称としては、‘Cefnbychan’ 「小尾根」というのは、現在、手元にある資料では、Morgan, The Rev. Thomas (1887: 102.) にしか出てこないのである。

そのような事実から、ジョージにその呼称を教えた地元のお婆さんは、間違っ  
て ‘Cefn Bach’ と答えたのではなく、明らかに意図的にそう言ったと解釈  
できるのである。なぜなら、ジョージの英語での問いかけに “Dim Saesneg” /dim  
saisneg/ 「ディム・サイスネッグ」(英語はわからないわ) と言ったカムリの婦人  
Cymraes— 「カムリ人」の総称は、複数形の Cymry /カムリ/ だが、単数の男  
性カムリ人は Cymro /カムロ/ であり、単数の女性カムリ人は Cymraes /カム  
ライス/ である — は、カムライグ語のネーティブである以上、‘Cefnbychan’  
「小尾根」という尾根の名前を ‘Cefn Bach’ 「小さな尾根」と間違えるはずは  
ないのである。筆者は、前述の推測が、あながち「当てずっぽう」ではなかつ  
たと、密かに自信をもったのであった。ただ、筆者の調査が不十分だったのか、  
この ‘Cefn Mawr’ 「大尾根」と呼ばれる「小さな尾根」の近く ‘close proximity’  
にあるとされているもっと小さい ‘Cefn Bychan’ 「小尾根」を現場では見つける  
ことができなかつたのである。20 世紀に入ってからの周辺の「開発」で、「小尾  
根」は姿を消してしまったのであろうか。そのような風景は、日本でもしばし  
ば、あちこちで見かけることであろう。「カムリの国の七不思議」の一つとして  
記述しておこう。

本稿を執筆するに当たって、この件を再読したが、かつてカムリの里を方言  
や地名研究、碑文の現地調査で走り回っていたころを懐かしく振り返ることが  
できた。

#### 参考文献

Borrow, George (1982) *Wild Wales, its People, Language and Scenery* (初版  
1862, Glasgow: William Collins Sons & Co. Ltd), Third Impression,

- Fontana / Collins.
- Caradar (c. 1925) *Welsh Made Easy*, Part I & II, Wrexham: Hughes & Son.
- Davies, Elwyn (golygydd) (1975) *Rhestr o Enwau Lleoedd*, paratowyd gan Bwyllgor Iaith a Llenyddiaeth, Bwrdd Gwybodau Celtaidd, Prifysgol Cymru, Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru.
- Evans, D. Simon (1970) *A Grammar of Middle Welsh*, Dublin: The Dublin Institute for Advanced Studies.
- King, Gareth (1993) *Modern Welsh: A Comprehensive Grammar*, London and New York: Routledge.
- Morris, T. E. (1938) *Welsh Personal and Place Names*, Broadcast in the Programme for Wales on Monday, 4th July, 1938, 9.0-9.20 p.m., Printed by students in the North-Western Polytechnic Printing Department, Prince of Wales Road, London, N.W. 5.
- Morgan, the Rev. Thomas (1887) *Handbook of the Origin of Place-Names in Wales and Monmouthshire*, Merthyr Tydfil: Printed for the Author by H.W. Southey, "Express" Office.
- 同書の第2版は、*The Place-names of Wales*, by Thos. Morgan (Skewen), Second and Revised Edition, Newport: John E. Southall. として、1912年に出版された。著者が、1897年の Newport National Eisteddfod で、'A Dictionary of Welsh Names of Places and Rivers in Monmouthshire' が入賞、10ポンド10シリングの賞金を受けため、モンマスシャの地名については別途出版を考え、この第2版からは省かれている。次項参照。
- Morgan, Thos. (1901) *Glamorganshire Place-Names, with Names of Mountains, Fields, Historic Places, &c.*, Newport, Mon.: John E. Southall.
- Richards, Melville (1969) *Welsh Administrative and Territorial Units: Medieval and Modern*, Cardiff: Univ. of Wales Press.
- Stephens, Meic (Casglwyd a golygwyd) (1986) *Cydymaith i Lenyddiaeth Cymraeg*, Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru.
- Stephens, Meic (Compiled and edited) (1998) *The New Companion to the Literature of Wales*, Cardiff: Univ. of Wales Press.
- Thomas, Beth a Thomas, Peter Wynn (1989) *Cymraeg, Cymrâg, Cymrêg. . . Cyflwyno'r Tafodieithoedd*, Caerdydd: Gwasg Taf.
- Thomas, Ceinwen H. (1982) 'Registers in Welsh', *International Journal of Sociology of Language*, 35, pp. 87-115.

辞書・地図

*Geiriadur Prifysgol Cymru*, Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru.

*Map yn y Gymraeg*, Y Drenewydd: Cyhoeddiadau Stad.

*Road Atlas 2000 Britain*, Ordnance Survey (1999)

[次号に続く]